

# 燃料確保に奔走した日々

小林 康宏（仙台市水道局総務部総務課主幹兼研修係長）（当時所属：施設課）

当時、私は水道局の電気機械設備に関する大規模工事を担当する部署におり、その日は水道局本庁舎の会議室で他部署との打合せに参加していた。揺れを感じた最初のうちは、すぐに収まるだろうと高を括っていたのだが、次第に尋常ではない揺れ方となり、近くの職員と声を掛け合っただけの下に潜り込んだ。ようやく揺れが収まって室外に出ると、庁舎内はどこも書類をひっくり返した様な有様。停電で庁舎の電源も非常用自家発電に切り替わり、紛れもない非常事態であることを実感した。

稼働中の工事現場の状況確認と当面の作業中止の連絡をしていると、テレビの生中継で沿岸部が津波に襲われている映像が飛び込んできた。その場の誰もが息をのみ、絶句していた。

間が悪いことに、その日は携帯電話を家に忘れてきており、職場で借りた一般電話もつながりが悪く、家族の安否確認ができないことに気が気ではなかったが、道路も大渋滞で直接確認に行くことも不可能な状況。ジタバタしても仕方がないと気持ちを切り替え、職務に専念することにした。

危機管理マニュアルに基づき、私の所属する係は市内に数十か所ある配水所・送水ポンプ場の維持管理を行う班（施設巡回復旧班）に編入され、発災当日は遠隔監視システムや現地巡回により各施設の運転状況や被害状況の確認に当たった。

当日の深夜、業務がひと段落したのを見計らって家の様子を見に行くと、幸い家族には怪我がなくホッとした。我が家はオール電化のため、停電で全機能が停止状態。情報源はラジオしかなく、家族は津波の映像も見えていないとのことだった。いざという時のために用意しておいた石油ストーブが暖房と煮炊きに大活躍していた。

当面の着替えを持って職場にトンボ帰りすると、翌日になっても停電は広域的に続いており、遠隔監視用の電話回線も次第に不通になっていった。復電の見通しが立たない中で、配水所・送水ポンプ場の現場巡回や非常用自家発電設備による機能維持が当面の業務となったが、その要となる燃料の確保には本当に苦労した。

当時においても、本市の配水所・送水ポンプ場には非常用自家発電設備が整備されていたが、発災時の燃料残量は最大でも24時間分しかない状況だった。配水池の水位を人力で監視し、送水ポンプの運転が必要な時にだけ非常用自家発電設備を手動運転すること等で延命化に尽力したが、燃料不足で一時は機能停止に至っている。

また、通信回線の輻輳や停電による基地局の機能停止等で携帯電話も使用不能になる中、業務用

無線が応急給水・応急復旧活動における情報連絡の生命線となっており、業務用無線設備の機能継続も重要な任務となった。本市水道局の業務用無線システムは直営で整備しており、市内全域で広域通信を行うための中継設備にも非常用自家発電設備を設置していたが、その常時稼働のための燃料補給を行う必要があった。早朝からガソリンスタンドに並んだり、比較的余裕のある送水ポンプ場から燃料缶で移送したりするなど、様々な方法で燃料を調達し、市内数か所の中継設備を油まみれになりながら駆けずり回っていた記憶がある。

この様な対応が何日か続くと、職員が通勤に使用する車の燃料が確保できないという問題にも直面した。私も含め、庁舎に泊まり込む者もいたが、全員に強要する訳にもいかない。公共交通機関も停止している中、非常時の対応として、公用車に複数名が乗り合わせて通勤することになった。

この他にも、燃料が枯渇するまで稼働した自家発電設備が燃料供給管にエアを噛んで起動不能に陥り、その復旧に現地オーバーホールを要したことは想定外であった。この様な非常事態の中、迅速に対応して頂いたメーカー代理店の方々には感謝しかない。

これらのトラブルを教訓として、その後、本市水道局の非常用自家発電設備については、重要施設の燃料備蓄量を72時間以上とすると共に、燃料小出槽の残量が一定量以下になると自動停止する機構を取り入れている。また、石油連盟や地元業界、他都市水道局との間で協定や覚書を締結し、非常時における円滑な燃料供給への備えについても強化された。個人的には、他都市の一部に見られる様な、水道局独自の燃料貯蔵給油設備の整備についても、検討していくと良いのではないかと考えるところである。

今回の企画に当たり、当時の出来事についてできる限り思い返して見たのだが、文章にできたのはごく一部であり、実際にはもっと色々なことがあった様な気がしている。私の記憶力の問題ももちろんあるだろうが、正直なところ、あまり思い出したくないという心理も働いているのかもしれない。とは言え、自分自身の気持ちの整理をつける意味でも、今後の災害で同じ轍を踏まないためにも、この様な記録を残すことには一定の価値があると思うところである。拙稿が少しでも皆様の参考となれば、幸いである。